

笛吹市御坂町亀甲塚古墳出土管玉の再整理

石 神 孝 子

- 1 はじめに
- 2 亀甲塚古墳の研究史

- 3 管玉について
- 4 まとめ

1 はじめに

筆者は、近年刊行された山梨県史資料編(遺跡編)の中で、「亀甲塚古墳」の記載を担当する機会を得た。これが、筆者が初めて亀甲塚古墳の出土遺物に触れ、あらためて本古墳と向き合うようになったきっかけである。

本古墳は、昭和23(1948)年に主体部の発掘調査が行われ、その時に出土した盤竜鏡と管玉は、現在考古博物館に所蔵されている。盤竜鏡と管玉の実測図は、すでに坂本美夫氏によって作成されており、盤竜鏡は舶載の漢式鏡であること、管玉は53点すべてが細管状の碧玉製で、一方向からの穿孔であると観察結果が述べられている(註1)。

しかし筆者は、管玉の穿孔部を観察するうちに、管玉の穿孔方法が両側穿孔ではないかと疑問を持つようになった。管玉が細く、肉眼観察では限界があると判断し、帝京大学山梨文化財研究所の鈴木稔氏に相談したところ、X線写真撮影の協力を得ることができた(註2)。今回その撮影結果をもとに、新たに実測図を作成し、ここにその調査結果をまとめものである。

2 亀甲塚古墳の研究史

本題に入る前に、本古墳の研究史について、若干触れておこう。

本古墳は笛吹市(旧東八代郡)御坂町成田に所在し、甲府盆地を北東から南西へ流れる、笛吹川左岸に立地する(第1図)。

前節で述べたように、本古墳は昭和23(1948)年に当時甲府二高教諭であった中島正行氏によって主体部の発掘調査が行われ、翌年には調査に携わった学生、村松真琴氏によってその概略が報告された(註3)。

その後、永峰光一氏は、「甲府盆地における古墳出土鏡の新資料」(註4)で発掘調査時に出土した盤竜鏡に着目し、さらに翌年の「古墳と環境—甲府盆地の場合—」(註5)の中で、本古墳を甲府盆地における「古墳時代の中期を形成する古墳」としてその性格を位置づけた。

坂本美夫氏は昭和51(1976)年に刊行した『甲斐考古』別冊2号(註6)の中で、盤竜鏡と管玉の実測図を掲載した上で、盤竜鏡が古墳時代前期から中期に多く見られるものであること、管玉が細管状で碧玉製である点から、弥生時代

の形態を保ち、しかも他の種類の玉類が見られないことから、管玉のみの首飾りであることを想定し、古墳の年代の下限の参考としている。しかしこれらの他に、現在は所在不明である直刀残片・矛残片・鎌・鑿(?)の類が出土したとされる点から、その組み合わせに着目し、東八代郡豊富村に所在する王塚古墳以前の前Ⅳ期(5世紀前葉)に築造されたと推定している。

さらに出月洋文氏は、昭和50・51(1975・76)年度に山梨大学考古学研究会が作成した本古墳の墳丘実測図を『丘陵』第9号に発表し(第2図)、本文中で『東八代郡誌』(註7)の記述や地元の人々の聞き取りから、「本古墳が前方部のごく小さな前方後円墳、あるいは帆立貝形の墳形」である可能性があることを提起した(註8)。

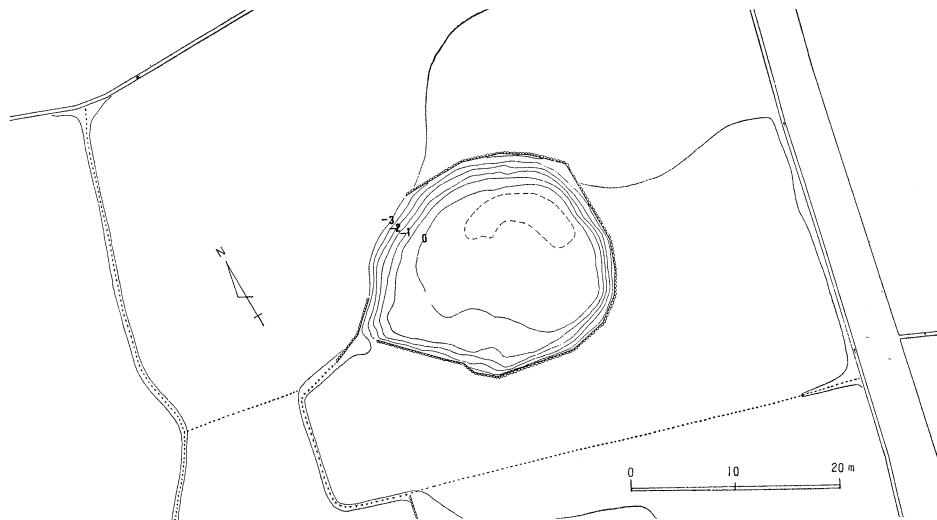
3 管玉について

第3図は今回新たに作成した管玉実測図である。合計53点が確認されている。このうち5点は破損しているが、4点は修復されている。また写真1はX線写真である。

長さは1cm以下のものが11点、1cm~1.5cmのものが40点、1.5cm以上のものが2点認められる。直径は0.3~0.4cmの範囲に収まる。いずれも細く、径は一定しているが、長さはばらつきが見られる。



第1図 亀甲塚古墳位置図



第2図 墳丘実測図 (S51 山梨大学考古学研究会作成)

番号	長さ	径	色調	穿孔方法	その他
1	0.90	0.30	明緑	両側	
2	0.90	0.35	明緑	両側	
3	0.90	0.40	明緑	両側	
4	0.90	0.30	浅黄緑	両側	
5	0.90	0.30	濃緑	両側	
6	1.00	0.30	明緑	両側	
7	1.00	0.30	浅黄緑	両側	
8	1.00	0.35	緑	両側	
9	1.05	0.30	浅黄緑	両側	
10	1.10	0.35	緑	両側	
11	1.10	0.35	緑	両側	
12	1.10	0.35	明緑	両側	
13	1.20	0.35	濃緑	両側	
14	1.20	0.40	緑	両側	
15	1.20	0.30	緑	両側	
16	1.20	0.30	明緑	両側	
17	1.20	0.35	まだら明緑	両側	
18	1.25	0.35	濃緑	両側	
19	1.30	0.40	緑 (明緑筋混じる)	両側	
20	1.30	0.35	濃緑	両側	
21	1.30	0.35	明緑	両側	
22	1.30	0.35	濃緑	両側	
23	1.30	0.30	明緑	両側	
24	1.30	0.35	明緑	両側	
25	1.40	0.40	緑	両側	
26	1.40	0.30	まだら明緑	両側	
27	1.40	0.35	緑	両側	

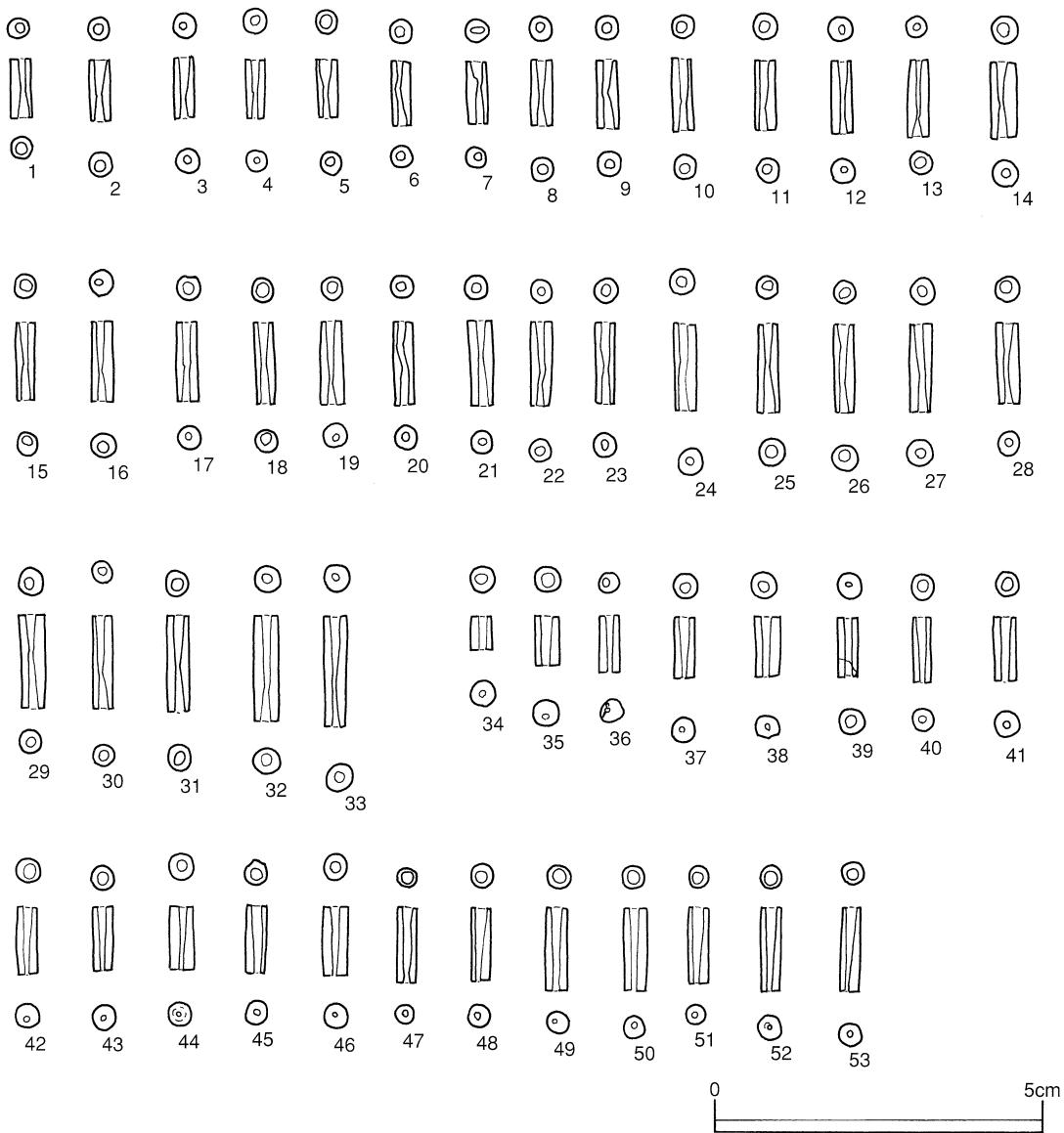
番号	長さ	径	色調	穿孔方法	その他
28	1.25	0.35	緑灰	両側	
29	1.45	0.40	浅黄緑	両側	
30	1.45	0.30	浅黄緑	両側	破損
31	1.50	0.35	緑灰	両側	
32	1.65	0.40	濃緑	両側	破損
33	1.70	0.35	緑	両側	破損
34	0.50	0.35	明緑	片側	
35	0.70	0.40	濃緑	片側	
36	0.90	0.30	濃緑	片側	
37	0.90	0.35	濃緑	片側	
38	0.90	0.40	濃緑	片側	
39	0.90	0.35	明緑	片側	破損
40	1.00	0.30	濃緑	片側	
41	1.00	0.35	緑	片側	
42	1.00	0.35	まだら明緑	片側	
43	1.00	0.30	緑	片側	
44	1.00	0.35	濃緑	片側	
45	1.10	0.35	まだら明緑	片側	
46	1.10	0.40	濃緑	片側	
47	1.15	0.30	緑	片側	
48	1.15	0.30	明緑	片側	
49	1.30	0.35	明緑	片側	
50	1.30	0.35	明緑	片側	
51	1.20	0.30	浅黄緑	片側	
52	1.30	0.35	緑	片側	
53	1.30	0.30	緑	片側	破損

第1表 管玉計測表

石材はいずれも碧玉製である。色調は緑色を呈するが、肉眼観察では濃緑色・緑色・明緑・浅黄緑4種類に分類が可能である。この色調の格差は、石材の違いであると推測される。とくに特徴的な浅黄緑色の管玉の一群は、それぞれの玉で、石材のまだらな状態も共通しており、これらは同じ石材から作り出された可能性がある。明緑色も同様である。濃緑色・緑色については、色調以外にこれといった特徴が見られず、一概に同じ石材であるとは断定しがたい。

穿孔方法は、両側から穿孔されたものが33点見られる。一方片側から穿孔されたものは20点である。第3図1~33

は、両側から穿孔された管玉である。孔の直径はおおよそ1.5~2.0mmで、玉の中央付近で孔が結合している。1.5cm以上を計る管玉2点も両側から穿孔される。一方34~53は、片側から穿孔されたものである。始点部分の径は大きいものでは2.5mmと、玉の壁がかなり薄くなってしまっているものも見受けられる。一方終点部分の径はおおよそ0.3~0.5mmである。終点部分は、玉の径が細いこともあるが、非常に丁寧に孔を穿っている様子が窺われ、ほとんどバリが見られなかった。片側穿孔を施した管玉は、長さが1.0~1.3cmのものが14点、0.5~1.0cmのものが6点であり、両



第3図 管玉実測図

側穿孔を施した管玉の1.4cm以上8点、1.0~1.4cmのもの20点、0.5~1.0cmのもの4点と比較すると、片側穿孔の管玉の方が小さめであることがわかる。これらのことから、管玉作成段階が、片側穿孔が取り入れられて間もない段階であった可能性を窺うことができるのではないであろうか。

4 まとめ

このように本古墳出土の管玉は、両側穿孔が施されたものが多數含まれることを確認した。現時点では、穿孔方法に両側穿孔を採用した管玉の一群は、甲府盆地では他に類例が認められない。玉類の穿孔方法は、玉の種類や玉つくり集団、地域差や時間差など、様々な要因によって異なる。管玉に限って見てみれば、おおよそ両側穿孔から片側穿孔へ変遷するという流れは、様々な点で若干の差異があるにせよ、かなり広範囲で共通しているものと思われる。

ところで本管玉の特徴の一つである直径3mm前後のいわゆる細管状の管玉について、触れておこうと思う。本管玉

のように、0.2~0.4cmの径を持つ管玉は、弥生II期に上限が求められる。このような管玉を製作した玉つくり遺跡は、第1段階のものとしてとらえ、兵庫県南部から伊勢湾沿岸に遺跡が点在する一方で、日本海側沿岸に沿って密に分布する(註9)。細管状の傾向は、弥生時代を通じて維持され、古墳時代に入ても残存するが、徐々に太管状へと段階的に移行する。

今回取り上げた管玉の特徴は、まず両側穿孔と片側穿孔の両方が採用されていること、さらに細管状であることがあげられる。両側穿孔で細管状であるという特徴はいずれも弥生時代の管玉の様相が色濃く、甲府盆地の管玉の中でも、古相段階に位置づけることが可能であると考えてよい。また具体的にこの管玉の一群が、盤竜鏡と共に伴することは年代的にも矛盾はないと考える。

本古墳から出土した遺物は、現在管玉と盤竜鏡しか伝えられておらず、詳細については不明であるが、この管玉と盤竜鏡のみの共伴関係を見る限りでは、現行の築造年代に



写真1 X線写真

は疑問を感じずにはいられない。また出月洋文氏が述べるとおり、墳丘形態も未だ不明瞭である。内部構造と墳丘形態、これらが明らかになれば、あるいは甲府盆地の出現期の古墳の様相の一端が明らかになる可能性も否定できないと思われる。

今後の亀甲塚古墳の調査に期待する。

拙稿を起こすにあたり、帝京大学山梨文化財研究所畠大介氏・鈴木稔氏・埋蔵文化財センター坂本美夫氏・保坂康夫氏・正木季洋氏にはご助言をいただいた。また帝京大学山梨文化財研究所鈴木稔氏には、管玉のX線写真を撮影していただいた。厚く感謝を申し上げます。

註

- (1) 坂本美夫 1978 「山梨県・曾根丘陵周辺地域の前期古墳等について」『甲斐考古』別冊2号
- (2) 管玉のX線撮影は、帝京大学山梨文化財研究所の協力により、2002年に実施した。
- (3) 村松真琴 1949 「亀甲塚の調査」『郷土研究』7
- (4) 永峰光一 1950 「甲府盆地における古墳出土鏡の新資料」『古代学研究』1
- (5) 永峰光一 1951 「古墳と環境—甲府盆地の場合—」『国史学』56
- (6) 註1に同じ
- (7) 山梨県教育委員会東八代支会 1914 『東八代郡誌』
- (8) 出月洋文 1982 「御坂町亀甲塚古墳の墳丘実測調査」『丘陵』第9号
- (9) 河村好光 1986 「玉生産の展開と流通」『生産と流通』岩波講座日本考古学3